

あとがき

今年の夏は異例の暑さで、40℃を超えた地域は、山梨県甲府市や四国四万十市、群馬県館林等だった。日本観測史上初の記録、41℃となったのは四万十市で、炎暑は観測史上最高記録の報が相次ぎ、熱中症で病院に搬送された患者や死者が相次いだ。

九月中旬には、台風十八号が列島を破壊蹂躪し、突風が東日本を襲い、河川の氾濫は滋賀、京都、福井の広範に及び初の特別警報が発せられ大きな爪痕を残した。

私が時代物を志し本作で五作目となるが、今年は筆を休めて一年間充電期間とする心算であった。だが私の歴史物の読者二人が、はからずも三月某日ある資料を届けてくれたのである。一人は、朝のラジオ体操仲間である。松本の桐原城に縁のある遠山家に嫁いだ同市笹賀ご出身のご婦人の方で、ご主人から委託の資料は江戸時代まで遡る遠山家の家系図であった。TVや映画で人気の「遠山金四郎」こと遠山左衛門尉景元ら他、遠山家に関する解説書だったのである。TVや映画で描かれる「遠山金四郎」は虚像であるとは知っていた。

教職の父の関係で、小・中学校まで松本の^{あがた}県町、高校では西町へ転居経験を有したが、寡聞にして遠山家のご子孫の方が、松本近辺（浅間温泉^{じもとや} 地本屋錦の湯、入山辺他）に今も居られ

ることを知らなかった。

二人目は、歯の治療で毎回お世話になっている近隣の三井歯科医院の萩原寛司院長先生である。戴いた資料は、今回『櫻樹の塚——文明開化に引き裂かれた真塩紋弥』著作の主人公真塩紋弥に関するネット検索の資料だった。どうやら真塩家に養子に入った六郷村の中島竹次郎が、院長先生のご先祖にあたる方のようなのである。

かつて私の母方の縁で、群馬県題材の本を三作ほど執筆した経緯があるが、榛名山の「秣場騒動」に関しては、昔上州に頻発した米騒動や世直し一揆の類と思つて当初は余り関心を示さず過ごしていた。

大学卒業後初めての勤務場所は、高崎市岩鼻町にある日本化薬(株)中央研究所であった。

岩鼻陣屋跡地の会社社宅に住み数年の経験があつたが、縁あつて菩提寺のある藤岡市小野に家を造つて移り住んだ。

その岩鼻町に、江戸時代岩鼻陣屋が創建され、悪代官を国定忠治が襲つたとの逸話は聞いてはいたが、まさか岩鼻牢獄に紋弥が投獄され、晩年亡くなつた場所が鬼石町三波川と知るや、私の土地勘のある場所に次々と誘われる思いで、次第に大惣代真塩紋弥の生き様に興味が湧いてきたのである。

母の係累は、日航機の墜落した上野村、神流町万場、藤岡市鬼石、菩提寺のある藤岡市小野

に居る。小野から勤務地日本化葉榎の研究所に通った。

興味をそそられた点はそれだけではなかった。

ネット検索で、近藤清が初代典獄（岩鼻獄舎の刑務所長）と知り、ご子孫の近藤医師に娘が大変お世話になった記憶と繋がった。更に真塩紋弥で検索すると、『隠居の思ひつ記』なる興味あるブログを発見した。

全く人の縁とは何処で繋がるか判らない。

さて、私の時代物一作目は、西上州甘楽郡富岡市に存在したという七日市藩舞台の『七日市藩和蘭葉記』で、九谷焼陶工を主人公の『陶匠の血脈』、更に横浜元町舞台の『元町維新―横浜開化秘聞』で二、三作目と続き、四作目が富岡市隣町に存在の下仁田町中小坂舞台の小説『鷺の笛 中小坂鉄山秘聞』であった。

今回の五作目『櫻樹の塚―文明開化に引き裂かれた真塩紋弥』の執筆の動機については、因縁めくが冒頭述べた如くである。

真塩紋弥の株場騒動をノンフィクションとして忠実に再現し克明に描いても、地元の方々や関係子孫の方々はとも角として、出版不況の折から版元が興味を示すとは思わなかったし、私の歴史小説の読者の購読意欲をそそり、関心を惹くとも思われなかった。

ある日、三井歯科医院に治療で伺った折である。

紋弥の妻の妹が、明治の元勳で第三代内閣総理大臣山縣有朋のお妾さんに成ったとの話を聞いた。そこで真塩紋弥を縦軸で通し、山縣有朋という人物を横軸にして描く構想が浮かんだ。更に面白く運ぶために、お妾となった女性を紋弥の末の娘と想定した。妻を郷里に連れ帰った事から、紋弥恋慕の女性はサダだったと考えた。そこで「秣場騒動」の中で育まれた、紋弥と妻サダの夫婦愛の物語とする構想も浮かんだ。

舞台となった堤ヶ岡村三ツ寺堤の現地を雨中五月末に訪問した。かみつけの里博物館の元町誌担当の方の案内を受け、稲荷台の紋弥の墓石、諏訪神社内の顕彰碑、そして私塾のあった屋敷跡を訪問すると、庚申塚を覆う桜の二本の古樹が目を惹いた。

取材で入手した、堤ヶ岡村誌や群馬県史等に取り上げられている紋弥像が臆気ながら見えてきた。著名な歴史上の人物よりも、歴史の闇に埋もれた市井の人物に光を当てて描くのが好みで、私の時代物作風の主張であり特徴でもある。資料を読んだ限り、紋弥は正に私の執筆方針に合致すると思った。

『櫻樹の塚——文明開化に引き裂かれた真塩紋弥』の前段、幕末から維新初期までの時代では、脇役として紋弥に絡む八州廻りで隠れ同心山村主膳と、利根川を根城にする船頭の遠山常左衛門を登場させ、舞台を江戸と郷里のみならず、紋弥と妻サダの二人が共に活躍する地域を広げ横浜を想定した。何故横浜に拘ったかと言えば、三年程私が横浜のシルクセンタービルで、ベ

ンチャー企業の立ち上げに関与した経験があったからだ。

資料を読み史実を調べて困ったことが起こった。

資料に拠ると、紋弥が儒学者の成島司直もとなお（図書頭）の塾に十九歳で入門するとなつてゐるが、天保九（一八三八）年誕生の紋弥の十九歳時は、安政四（一八五七）年で、成島の没年は文久二（一八六二）年である。これは一体どうしたことか？ 漢学修業期間は一体何年間？ 死期真近で弱つていた師に就き修行が果たして出来たのか？ と様々な疑問を突きつけられた。

そこで便法として、紋弥が十三歳で家族に見送られ故郷を辞して江戸を目指し、成島塾で十九歳まで六年間みっちり漢学の修業をしたことを想定した。

直ぐ故郷に紋弥が戻るのでは、主題の「秣場事件」の発生時期までに余りに時間が有り過ぎる。その間の紋弥の去就が全く資料には掲載されておらず、不明であつたので、物語をどう進行させるのか困惑した。

六月上旬高崎市立中央図書館市史担当部署に伺い、紋弥が生きた時代の資料を取材。ここでの資料収集で予想以上の収穫があつた。明治初年の岩鼻監獄に関する資料、高崎藩五万石騒動、紋弥が晩年に関与した「切干し塚」の碑文に関する貴重な資料を入手できたのは幸いだつた。窓口対応の女性職員は、五万石騒動に登場した人物のご子孫という偶然も重なつたのである。

寺子屋に類する紋弥の塾の模様を、縷々描いても読者にとつては全く面白味に欠け、文脈構

成の屁の突つ張りにもならない。そこで先ず横浜で先輩塾生と共同の塾「芳叢書院」を経営することを想定とした。

今回は筋立てに様々な工夫を凝らした。

昨年九月末、英国威爾斯^{ウェールズ}に家内と二人で世界遺産の名所探訪の旅に出掛けた際、不思議な体験、というよりは発見をした。前作『鷺の笛 中小坂鉄山秘聞』の舞台となった下仁田の名産は、著名な下仁田葱である。現地で余りに酷似した西洋葱の存在に驚き文献調査すると、葱は地中海付近で栽培される稀有な阿爾泰種^{アルタイ}であろうと推察できた。これを本書でも活かしている。なおこの発見は読売新聞の地方版にも掲載（H24・10・18）されたのである。

前段は、上州で多発した米騒動や世直し一揆を八州廻りの山村主膳と遠山常左衛門が巧妙に捕縛取り締まる光景を描く。主膳は小栗上野介忠順の特命特務同心という想定にしたので、歴史物を好む中高年や忠順ファンも満足できるかな？ と期待したい。

後段は、紋弥の塾生の妻沼聖天堂歎喜院への修学旅行を描きながら、明治維新の元勳山縣有朋の懊悩と、大惣代紋弥の中野秣場騒動との苦闘を交錯させた。五万石騒動や秣場騒動に、ノンフィクション作品で使われるルポルタージュ風記述を試みた。

女性の登場人物は、先ず妻サダ、郷里の母蔦を始めとして、紋弥の母姑ミツ、紋弥の双子の姉妹厚^{アツ}と咲^{サク}と多彩であるが、硬い男の歴史物語の中に、少し埋没している点は否めない。

明治時代の妾は、妻と共に法的に認知された存在ではあったが、何と「蓄妾ちくしよ」と呼ばれていた事に、今の感覚からその呼び方が奇異で愕然とした。更に驚くべきことは、政界・官界・財界の著名人の妾暴露記事「萬朝報よろずちやうほう」なる新聞が、当時著名な探偵小説作家の黒岩涙香主筆で発刊されていたことである。

戴いた村誌・郡誌・県議会誌の類は膨大である。

十分に咀嚼した上で、本作品に活かされたのかというと、内心忸怩たるものがある。終止私を突き動かしていた衝動は、官憲を震撼させ得る程に命を輝かせて散った社会運動家紋弥の覇気と、人々の温かいご厚情に応えたいという思いだった。

資・史料を基に、ノンフィクション的手法を随所に盛り込んだ。作中の登場人物や場面に実際と似た個所が仮にあつたとしても、全て作者の創造の産物であることは断るまでもない。

資・史料入手や寄稿で次の人々に御世話になった。

遠山家の家系図等をご提供戴いた遠山昇夫妻、三井齒科医院の院長萩原寛司氏、お母様の萩原眞壽美氏、高崎市立中央図書館市史担当の青山喜三雄係長、羽鳥康子氏、紋弥の屋敷跡の写真をご提供して戴いたかみつけの里博物館の元町誌担当志村隆氏、今回は拙著に深い理解を示し、時代物ドラマの琴姫七変化やカレーのコマーシャルで著名な往年の名女優松山容子氏からのご寄稿を、拙著作品評ではお馴染みの評論家村木哲氏からは過分な書評を賜った。

特に高校時代の先輩との機縁もあり、版元の(株)図書新聞代表取締役社長井出彰氏には厚く感謝したい。同社馬渡元喜部長、青玄社の高橋和敬氏、そして装幀を引き受けてくれた宗利淳一氏、こうした人々の存在なくば本著は世に出なかつた。また拙著を熟読・支援してくれる地元上尾市の有志の方々にもここに感謝したい。

最後に、時間の観念無く起床する私の小説や随想の執筆を容認して、諸事万端支援してくれた家内にも併せて感謝したい。

二〇一三年十一月十六日

たなか踏基